渡辺文夫著「異文化と関わる心理学―グローバリゼーションの時代を生きるために―」セレクション社会心理学-22 サイエンス社 2002 年 3 月 10 日刊を読む

関係は本質に先立つ
―異文化接触における統合的関係調整能力―

１．筆者は、ある大手の自動車会社から発展途上国へ技術指導のために派遣された日本人技術者全員を対象に調査を行い、関係優位の考え方をもっている人ほど現地で充実感をもって技術指導をしてきたことを明らかにしました。関係優位の考え方とは、次のようなことです。

２．調査をしたところ、派遣技術者たちが持っている、任地国での技術指導上の問題に対処するときにとる思考上のストラテジーとして、以下の四つがあることがわかりました。

（１）**「行動の手がかりと評価の明示」**
①計画をはっきりやらせる
②はっきり自分の意志を伝える
③仕事をやればよく評価する・ほめる、間違いを注意する
④どうしようもないので特別なにもしない
⑤理由をはっきりさせる
⑥はっきり伝える
⑦任地国の人たちがちゃんとやってくれるような環境を作る

（２）**「コミュニケーションの有効化」**
①仕事の仕方を説明する、教える
②任地国の人たちが自分でやるようにもっていく
③現地語を習う
④労働条件を説明する、教える
⑤電話や手紙・文書ではなく任地国の人たちとは直接あって話す

（３）**「被指導者への密着指導」**
①任地国の人たちの中に入っていく
②飛込んで行く
③任地国の人たちに対する否定的な気持ちを抑える
④任地国の人たちと一緒に遊び食事をする
⑤監視する

（４）**「不断念・前進」**
①冗談や皮肉で対応する
②任地国の人たちに日本人や日本的なことを理解しまた慣れてもらう
③任地国の人たちに頼らないで自分自身で仕事をやる
④やり方や順番を変えてみる
⑤任地国の人たちと一対一で話し合う

３．さらに、自らが行った技術指導上の問題への対処が効果的であったのかを判断するための手がかりをとらえる技術者たちの思考的な枠組みに、次の三種類があることが分かりました。

（１）**「相互関係の改善」**

①意志や気心が通じる

②仲間意識ができる

③任地国の被指導者は自分を肯定的に見てくれる

④仕事ができるようになる

⑤説明するとわかる

⑥親しくなる

⑦仕事がうまくいくようになる

（２）**「任地国の被指導者からの反発」**

①抵抗がない

②話しかけてくるようになる

③日本との違いを指摘される

④仕事をやってくれない

（３）**「指導上の依頼に対する被指導者の受諾」**

①気を腐らせない

②やってくれる

４．また、任地国で技術指導を充実感を持って行った技術者は、上述の対処に対する四つの思考上のストラテジーの中の**「行動の手かがりと評価の明示」**と対処の効果を知る三つの思考的枠組みの中の**「相互関係の改善」**を同時に重視していたこともわかりました。

５．（１）**「行動の手かがりと評価の明示」**のストラテジーは、被指導者が望ましい技術行動を引き起こしやすいように、その手かがりとなる事柄をはっきりと示し、望まれる技術行動ができたかどうかを被指導者がわかるように、結果としての評価をはっきりと与えるという対応の仕方です。

（２）このように「手がかり」→「行動」→「結果」という流れで物事を考えるのは、行動主義的な考え方です。このような行動主義は、「行動」と「環境すなわち刺激」の「関係」を重視した認識法なのです。

６．（１）これらのことから、技術指導を任地国でうまく行った技術者は、さまざまな事柄の「関係」の在り方を良く観察し、それらの「関係」をうまく調整することによって効果的な技術指導を行ったと考えられます。

（２）このような調整能力を、筆者は、「統合的関係調整能力」と名づけました。

（３）異文化で仕事をする場合に、自分や相手の価値観や感情に囚われずに、ひたすら「関係」の在り方を冷静に見定め、「関係」をうまく調整することによって課題を実現していく能力です。

（４）哲学的な言い方をすれば、「関係は本質に先立つ」という考え方で物事を実践できる能力といってもいいかもしれません。

７．ここでみてきたような資質を高めるためには、どのような教育を行ったらいいのでしょうか。次はその問題を考えていきましょう。

いわゆる一般的な異文化コミュニケーション・トレーニング、異文化トレーニングについては、八代ら(1999)や八代ら(2001)を参照していただくとして、ここでは、筆者が、企業や国際協力機関で実施している異文化関係における「統合的関係調整能力」を高める教育について紹介したいと思います。

８.「統合的関係調整能力」の課題

「統合的関係調整能力」の育成で課題となるのは、次の三つの点です。

（１）「関係」が変わることによって認識や行動が変わること。

（２）「関係」優位な認識を持ち行動をすることによって異文化関係の問題に効果的に対処できること。

（３）これら二つを学習者の全体的な意味づけのなかで統合的に「構成」すること。

９.（１）少し専門的な言い方で説明すると

①は、「異文化接触においては主観と客観が乖離していても『関係』は独立し機能する」という命題を学習すること

②は、「対人的な相互関係を活性化することによって効果的な異文化間行動が行える」ことを学習すること

③は、「①と②を学習者が自らの意味づけにおいて構成し、統合的に経験的に学習する」ことです。

（２）①と②に関しては、現象学的な考えを、③に関しては構成主義(constructivism)的な考え方を基盤に置いて方法を開発しました。

10. 統合的関係調整能力育成のための教育実習法

―現象学的異文化教育法(エポケー実習)―

（１）エポケー(Epoche)実習は、右に述べた①「『関係』が変わることによって認識や行動が変わる」ことを経験的に学習する方法です。

（２）エポケーというのは、現象学の中核にある認識のための意識操作の方法です。

（３）通常は**「判断停止」**あるいは**「判断中止」**と訳されますが、ここでは**「判断留保」**と訳すことにします。

（４）この意識操作の方法は、**自らが認識しているものや事象が自らと離れて客観的に存在していると考えず、その認識を絶えず括弧のなかに入れ、より慎重に知ろうとする認識の方法**です。

（５）認識した物事や事象が、絶えず新たな姿で認識されるようになります。

P61 ～ 66

＜コメント＞

「関係は本質に先立つか」という命題は、異文化教育方法論の根本問題であることを教えてくださった渡辺文夫先生の本書は、グローバル化が進む中で、日本人の必読書といえる。多様な集団で交流する能力の第一は、まずは自らの思考を一切停止し、相手をあるがままに受け入れてから、少しずつでもよい関係を構築する能力と言える。

― 2016 年 6 月 18 日(土)　林　明夫記―